

影 と 実 体

牧師 山本 護

ことのほか冷えびえとしている今年の秋。礼拝堂の扉が午後の陽で温まっているせいか、アキアカネがじっととまっています。そおっと扉を開けて堂内へ入り、用事を済ませて出る時も、そおっと。…おっ、まだ、いる。カメラを構えてぐっと寄ると、頭部をくりくりと動かし、どうやら生きています。



翌日、その姿はなく、ほっとしたような、残念のような心持ちで、扉の周囲をなんとなしに搜索する。秋が深まり、アキアカネの鮮やかな紅色が枯れてくすむと、実体が影に近づくのか、影が実体を覆うのか、どちらとも見分けがつかなくなります。とりわけ翅の影は、この辺りをすいすい飛んでいる時から、実体とほとんど同じ。

「とんぼ死んで影刻みおりくつきりと」。礼拝堂に黒い影はくつきり落ちていましたが、彫り込むように刻まれたのは扉ではなく心象に、でした。

「あなたがたは食べ物や飲み物のこと、また祭りや新月や安息日のことでだれにも批評されてはなりません。これらは、やがて来るものの影にすぎず、実体はキリストにあります(コリタイ 2:16~17)」。

伝統や律法による神への手がかりは「影」に過ぎない。この影、私たちに重ねて見るならば、祭礼や宗教儀式のようなものでしょうか。そうした歳時記に彩られた世は、キリスト者にとっていわば影で、再臨されるキリストがまことの「実体」なのだと。私たちはキリストを真ん中に据えているし、否を言うつもりはない。だが皮肉なことに、キリストという実体はいつまでも掴み尽くせず、一方、世という影には手応えがあって親しい。

やがて召されて憩うであろう神の御許が、光で満ちていたり、一面の花畑などではなく、影なる世と見間違ふような、雑多で悲哀ある場であったなら嬉しい。礼拝堂の扉で、影と実体が混然となっていたアキアカネのようであるなら、いいのだけれども。Ω